

持田篤先生ご退任に寄せて

学長 島 田 燐 子

持田篤先生がこの度本学をご退職された。先生は柏崎市のご出身で、声楽家を志されて東京藝術大学音楽学部声楽科に学ばれ、同修士課程を修了された。ご縁あって修士課程在学中から本学園の中学校・高等学校の音楽の非常勤講師をしていただいた。

当時の学校長、島田依史子先生からの信任厚く、生徒からも評判高く、開学2年目の文京女子短期大学の専任講師として1965年に就任された。70年には助教授に昇格されている。その間、NHK東京放送合唱団等でも活躍され、テレビにも出演され表現力を身につけられておられた。大学においても学生を懸命に指導され、同僚たちとも良く交流されておられた。やがて70年10月から72年11月まで西ドイツ国立北西ドイツ音楽大学に留学をされ、技術的にも磨きをかけられ、リサイタルを積極的に開かれるようになった。私の父は若い頃ベルリンに5年間も留学した人だったが、持田先生のファンになり、留学でドイツ語の発音や表現力が格段に向上したと褒めていたのを思い出す。

その後、78年から82年まで広島大学教育学部へ行かれたのだったが、どうしても本学へ戻りたいと云われ、前例のないことではあったが82年4月に短期大学保育科、経営学科の教授・学生部長として着任された。

このころから教育活動と同時にリサイタルの開催も本格化し、今、手元にあるのは1988年7月20日のルーテル市ヶ谷センターでの「冬の旅」第10回記念のチケットと、当時の島田和幸学長宛の「御多用中とは存じますが、御来聴いただければ大変光栄に存じます」という先生のお手紙である。実際、先生のリサイタルには多彩な来聴者が集まり、持田ファンが温かく先生と交流し独特の雰囲気があった。

学生指導にも熱心で「音楽」の授業ばかりかクラス毎のオペレッタを演出され、時にはご自身も出演された保育科の公演は忘れがたい。ふじみ野の地に文京女子大学が誕生し、短期大学保育科も大学人間学部となり、先生には学生部長をお願いした。大学として様々な先生が入職されたので、その和を保ちつつ新しい伝統を作っていくのはご苦労も多かったと拝察するのだが、よく職務に励んで基を築いてくださった。

また、合唱団「コール・エンジェルス」を育ててくださり、美しい女声合唱を楽しませてくださった功績も大きかった。この「コール・エンジェルス」のルーテル市ヶ谷センターでの公演を実現したいと予約をされた後に突然、病に倒れられたのではなかったかと思う。先生もさ

持田篤先生ご退任に寄せて（島田燐子）

ぞご無念であったことであろう。

病を得られてからも「必ず復帰する」との信念を持たれてリハビリテーションに励まれ、ここまで回復になられたことはまことに喜ばしい。

この闘病中に先生が「子守唄の持つ力」に言及され、先生の見解をお寄せくださったのは、持田先生ならではの感銘を受けた。研究論文とは性格を異にするのだが、先生の教育研究の結論が子守唄への言及というのは保育科で長く活躍してくださった先生に適しいのではないかと思う。

先生が本年ご停年を迎えられるまでには御奥様をはじめご家族の皆様の並々ならぬご看病とご協力があったと感慨深いですが、私ども大学関係者は先生の永きにわたるご尽力に心から感謝申し上げ、先生の温かいお心を大切にしたいと思う。

持田先生、永い間ありがとうございました。

(2007.11.8)